



Title	後期読本における「冤魂」「冤鬼」：曲亭馬琴の記述を中心に
Author(s)	池田, 真紀子
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2022, 5, p. 19-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87123
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

後期読本における「冤魂」「冤鬼」

―曲亭馬琴の記述を中心に―

日本文学 博士前期課程 2 年

池田 真紀子

1, 後期読本における「冤魂」「冤鬼」

『南総里見八犬伝』に代表される後期読本は、因果応報・勧善懲悪の筋書きをもつ、江戸時代後期の小説の一ジャンルである。初期の後期読本(寛政期末¹～文化期前半<1799～1810>頃の諸作とする)のうち、最多の作品数がある半紙本形態の読本には、幽霊の趣向が多い。そこでは、幽霊に対して「幽霊」「死霊」、その他、同様の意味と推測される「冤魂[えんこん]」「冤鬼[えんき]」²という表現も見られる。後期読本の前身である前期読本³や、百物語を扱う浮世草子や仮名草子⁴にも類似の傾向があるが、幽霊に対して「幽霊」「鬼」「死霊」「亡霊」の語が使われる一方で、「冤魂」「冤鬼」の語は見られない。後期読本に突然登場するようになった、この二語の、作品内における意味合いや、使われ方はどのようなものだろうか。

本発表では、主要作者である曲亭馬琴(以下、馬琴)による「冤魂」「冤鬼」への見解に注目し、作品におけるその様相の一端を明らかにしたい。なお、後期読本の諸作では、この二語を区別せず用いる傾向が見られるため、概ね同じ意味をさす語として扱う。

2, 馬琴の「冤鬼」観

まず、馬琴の評伝や随筆から、その「冤鬼」観を分析する。天保五年の『近世物之本江戸作者部類』(以下、『作者部類』)では、同時代の他の作者への評価が示されており、「巻之二上読本作者部第一」の「山東庵京伝」では、「これにより又『安積沼⁵』五巻を綴る(中略)こは俳優小幡小平治[こはだこへいじ]が冤鬼の怪談を旨として作り。」⁶とある。作中の小平次は、妻とその

¹ 後期読本の初作とされる山東京伝作『忠臣水滸伝』の前編は、寛政 11 年<1799>に刊行されている。

² 以下の本文では、読みの難しい語の直後に〔〇〇〕と、発表者が振り仮名を付してある。

³ 前期読本の都賀庭鐘作『英草紙[はなぶさぞうし]』(寛延二年)における「㊦紀任重[きのとうしげ]陰司[いんし(めいど)]に至り滞獄[くじ]を断[わ]くる話」では、地獄で裁判を待つ死者たちに対して、「怨鬼」「冤魂」という語が使われるが、文脈からして、現世に出現する幽霊ではない。(『新編日本古典文学全集 78』(小学館、1995 年)の、『英草紙』(中村幸彦校注・訳)を参照。)

⁴ 叢書江戸文庫2『百物語怪談集成』(国書刊行会、1987 年)、叢書江戸文庫 27『続百物語怪談集成』(国書刊行会、1993 年)を参照。

⁵ 山東京伝作『復讐奇談安積沼[ふくしゅうきだんあさかのぬま]』(以下、『安積沼』)をさす。

⁶ 曲亭馬琴著、徳田武校注『近世物之本江戸作者部類』(岩波書店、2014 年)の 179 頁を参照。

浮気相手によって殺害され、怪異現象を伴った壮絶な復讐劇を演じる⁷。これに関しては、『安積沼』の板本の見返しや内題で、「小幡小平次死霊物語」とあり⁸、作者の山東京伝(以下、京伝)が、小平次を「死霊」だと示している。

他方、随筆『燕石雑誌[えんせきざっし]』(文化八年<1811>)の、「卷之二(十一)鬼神論」⁹では、「冤鬼」への考察が見られる。ここでは、書いた易経を嘲笑されて崇る儒者や、処女にとりついて我が子に乳を与える女の霊、里子に出された我が子をあやす女の霊の話に触れ、「人死してその魂魄いまだ散ざる間は、冤鬼となりて人の眼に見ゆることもあるべし。我が俗、これを幽霊といふ。」「冤鬼の人に見らるゝも、この魂魄いまだ散ぜざるあはひにあるべし。其人死して夥の年を経たらんには、魂魄既に散滅す。魂魄散滅して冤鬼とならんと欲するともよくせんや。」とある。これらの「冤鬼」は、崇る・化けて出る・憑依するといった行動を取るが、供養を受けて自身の要望が実現されると、怪異現象はすぐにおさまる。

以上をまとめると、『作者部類』で言及された「冤鬼」は、他者の姦計で無念の死を遂げた人物の霊や、単純に死霊をさすものと考えられる。また、『燕石雑誌』における「冤鬼」の概念は、怪異現象を生じさせる死霊をさし、それらは目的が遂げられるとすぐに退散するものであった。こうした記述から、馬琴にとっての「冤鬼」とは、怪異現象を引き起こす死者の霊であるとわかる。随筆での「冤鬼」は、心残りの解消のために行動する霊であったが、後期読本の作品中の「冤鬼」は、壮絶な最期や無念の死によって、凄まじい怨霊となる存在であった。

3、『復讐奇談安積沼[ふくしゅうきだんあさかのぬま]』(享和3年<1803>)

ここからは、実際の作品内の「冤魂」「冤鬼」の振る舞いや役割について検討する。前述の『安積沼』は、京伝の後期読本の2作目で、安西喜次郎が東国各地を巡る仇討譚と、小幡小平次の怨霊譚とが組み合わされている。作中で本物の幽霊になる描写があるのは、小平次のみで、ここでの「冤鬼」とは、小平次をさすと考えられる。作品を概観すると、「冤魂」「幽霊」や、それ以外の類似の語が見られ、小平次に関する文脈は、生前の言動を示す場面と、死後に祟りをなす場面における2種類がある。

前者については、第四条で「小平次芸におゐて尽く下手なれ共、唯一ツ幽霊の狂言のみは別に妙ありて、(中略)ゆへに幽霊小平次ともいひけるとぞ」とある。第六条では、殺人鬼源西を自供させるため、首から血を流す女に変装した小平次が現れ、「(前略)妾は汝が毒手にかゝりて非命に死したる秋¹⁰が冤魂仇をむくはんため、これまであらはれ来れるなり。」と言って、源西

⁷ 山東京傳全集編集委員会『山東京傳全集 第十五巻 読本1』(ペリカン社、1994年)の、『復讐奇談安積沼』を参照。これ以降、この『安積沼』の本文は、全てこれを参照。

⁸ 国文学研究資料館『新日本古典籍総合データベース』内、関西大学図書館 中村幸彦文庫所蔵、書誌ID:100052289/DOI:10.20730/100052289を確認した。

⁹ 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成 第2期19』(吉川弘文館、1995年)、曲亭馬琴著『燕石雑誌』を参照。

¹⁰ 作中で、真犯人の源西に殺害された女性のこと。

に迫る。ここでは、小平次の演技の説明が多く、何度も「幽霊」の語が用いられる。特に情報が必要ならば、死者の霊を単に「死霊」「幽霊」と称するのは、ごく自然であろう。しかし、小平次扮するお秋は、自身は復讐を望む「冤魂」だと述べる。これを受けて源西は、「おん身の成仏得脱をねがひ為に香燭をそなへて、幽魂[ゆうこん]を慰し申さん。こひねがはくは冤[うらみ]をはらし憤りをやめて、我一命をゆるし、こころよく仏果にいたり玉へ」と、許しを請う。殺人者の前に、幽霊という超人的な存在となった被害者が現れることは、単純にホラーというだけでなく、その後の展開を劇的なものにする。罪を犯した悪人が、みっともなく怖れ惑う描写から、読者は、明確に「因果応報」「勸善懲悪」の場面として読むことができる。そうした見せ場を作り出すことが、ここで「冤魂」が強調される理由であろう。

では、後者の場面はどうか。小平次は妻の浮気に気づかずに殺害された。第七条で、妻の浮気相手の左九郎によって遺体から金品を奪われ、「これみな汝が愚なるによれば、人をうらむることなかれ」と、唾を吐かれた直後、遺体が左九郎に掴みかかる。第八条では、小平次の霊が妻の元に現れて腐臭を放ち、この場面から「冤魂[ゆうれい]」と呼ばれるようになる。その後も、腐った小平次の指が撒かれ、幻覚を見た左九郎が小平次の妻の指を切り落とすなど、非常に生々しく恐怖心を刺激する描写が畳みかけられる。このくだりは、凄惨な怪異現象を頻発させて、第七条から第八条までの短い紙片で、幽霊の趣向を効果的に印象付けようとしていることが推測されるが、それを踏まえても、罪を重ねる小平次の妻と左九郎が、小平次の霊によって破滅へと導かれる筋書きは、前者の場面と共通する。

以上のことから、『安積沼』では、死霊とされる小平次の生前と死後の両方の場面で、因果応報・勸善懲悪のテーマに沿う文脈が見られた。また、出現の動機が見られない霊は、「幽霊」とされ、強いうらみが生じる状況があると、明確に「冤魂」という語が用いられていた。

4. 『新累解脱物語[しんかさねげだつものがたり]』¹¹(文化4年<1807>)

次に、「冤魂」の語が多く見られる馬琴の『新累』の内容を分析する。死霊の報復が作品の主軸となり、私利私欲で罪を犯した人物の周りで「冤魂[おんれう]」による怪異が生じ、関係者が破滅していく。物語の構成は、前述の『安積沼』にも見られた「冤魂」の出現や、それに伴う因果応報・勸善懲悪の展開と共通するが、そうした物語の定型を、さらに発展させた文脈も散見される。

本作の前半部は、讒言で刑死した人物の祟りで、急病・頓死・災害といった冤魂出現の予兆のような現象が見られ、それに伴って、他の関係者の霊も徐々に姿を現す。作品の中盤の第五話では、人を死に追いやった人物の前に、「冤魂」とされるその犠牲者たちが現れ、これ以降、子どもの口走り、大蛇の出現、過失による殺人、死霊の笑い声などの怪異現象が頻発する。そして、終盤の第九話と第十話では、荒ぶる人面瘡の出現によって、村一帯を巻き込んだ騒動へと発展する。

¹¹ 以下、『新累』。大高洋司編『影印叢書4 曲亭馬琴作 新累解脱物語』(和泉書院、一九八五年)を参照。「解題」において、関西大学図書館所蔵本が底本であるとしている。以下の本文に関する考察は全て、これを参照。

このように、作中では、「冤魂」が小出しに配置され、それらが日常生活を侵食していき、しまいには、不特定多数の人物から視覚的・聴覚的にその存在が認識される。そうして、結末で事件の顛末を語る高僧が現れるまで、物語内の緊張感を高めていく様子が見受けられる。また、「冤魂」は「死」という段階を踏むことで、物語内の因果関係を俯瞰できる存在となる。重要な情報を生者に与えることで、その後の展開をも規定し、生者たちの悪事やその浅ましい本性までも暴露する。

加えて、『新累』における「冤魂」には、単純に「うらみをもった死霊」だけではなく、生者による生霊も含まれていた。本文終盤には、「怨るもの形體心神具足してこの世にあり、憎悪の一念死霊に勝る」とあり、「生霊」がもつ怪異的な力も示される。様々な「冤魂」の在り様と、それに伴う怪異現象を物語内に配置したことで、より重層的に恐怖と陰惨さを印象づける構造が作り出されたと言えるだろう。

5, おわりに

以上のように、後期読本の主要作者である馬琴の認識に基づき、「冤魂」「冤鬼」の語の概念を確認し、それらが作品内でどのように機能するのかを考察した。これらの語は、おおむね「怪異現象を起こす死霊」だと認識されていたが、実際の作品内では、後期読本の第一の特徴である因果応報・勧善懲悪のテーマを効果的に示す役割を担っていた。

この二語が後期読本において使われるようになった理由としては、読本というジャンルにおいて、本格的な様式を確立するにあたり、「復讐」という要素が因果応報と勧善懲悪のテーマに結びやすかったため、強いうらみと明確な動機をもった怨霊が出てくる構造が必要だったと考えられる。「冤魂」「冤鬼」は、そうした作品構造を実現する趣向の一つとして、作者たちから注目されていたのではないだろうか。

また、本発表の考察においては、従来の近世期の怪談に関する研究から史的な位置づけが難しかった読本研究史に¹²、「冤魂」「冤鬼」によって作り出される怪談的な作品が存在するという、新たな観点も提示できた。「冤鬼」「冤魂」への考察から、作者の京伝や馬琴が、後期読本に怪異的現象を戦略的に取り入れた形跡を追いつつ、今後の研究を進めていきたい。

¹² これについては、太刀川清『近世怪異小説研究』（笠間書院、一九七九年）、近藤瑞木「怪談物読本の展開」（『西鶴と浮世草子研究 第二号 特集・怪異』（笠間書院、二〇〇七年）所収）を参照。怪異や怪談に対する先行研究は、近世前期から中期にかけての、百物語の怪談会や怪異小説、浮世草子、仮名草子、前期読本に関するものしかない。